

初代梅若実と近代能楽

——時代を越えた能役者——

三浦 裕子

Zusammenfassung

Miura Hiroko: Umewaka Minoru I. und das moderne Nô – Ein Nô-Spieler von epochaler Bedeutung

Umewaka Minoru I. (1828–1909) war zu einer Zeit aktiv, in der das Nô die Krisenjahre der Meiji-Restauration überwand und sich so sein Fortbestehen bis in die Gegenwart sichern konnte. Dieser Artikel stellt die Leistungen von Umewaka Minoru in den folgenden Bereichen vor: 1. Schriften zum Alltag des Nô, wie z.B. das Tagebuch (*Umewaka Minoru nikki*); 2. Ausbau des Einflusses der Umewaka-Familie; 3. Bau von Nô-Bühnen; 4. Erweiterung des Repertoires sowie 5. Sammlung von Nô-Masken und Kostümen.

Von seinen Schriften soll vor allem die Bedeutung des Tagebuchs detailliert erörtert werden, das eine historische Quelle von größter Bedeutung darstellt. Es wurde in den 60 Jahren zwischen 1849 und 1908 nahezu täglich geführt, und zwar im Sinne einer Chronik der Umewaka-Familie und der Nô-Welt. Umewaka Minoru förderte wiederholt die Verbindung seiner Familie mit der Linie von Kanze Tetsunojô, einer Seitenlinie der Hauptfamilie der Kanze-Schule. So bildete er seinen Sohn Manzaburô (den späteren Rokurô) und seinen Schwiegersohn Kanze Tetsunojô VI. zu exzellenten und später renommierten Nô-Spielern aus. Desweiteren erbaute Umewaka Minoru 1865 eine Bühne zur Durchführung von Proben und 1871 die Nô-Bühne in Aoyama. Diese Bühne der Umewaka-Familie diente sowohl als Probephöhne wie auch für öffentliche Aufführungen und wurde zu einem bedeutenden Stützpunkt des Nô.

Umewaka Minoru war der erste, der die Nô-Spiele *Torioibune*, *Ugetsu* und *Murogimi* wieder in das Repertoire aufnahm.

Die Nô-Masken und Kostüme seiner Sammlung erwarb er gezielt von berühmten Nô-Familien, Daimyô, Kaufleuten und Fachgeschäften aus ganz Japan. Diese werden heute nicht nur als wertvoller Schatz der Umewaka-Familie sondern der gesamten Nô-Welt betrachtet und bis heute für Aufführungen genutzt.

(Übersetzt von Barbara Geilhorn)

はじめに

能楽が武家の式楽であった江戸時代において、能楽を演じる役者は武士として幕府や藩に抱えられ、身分や地位の安定を得ていた。しかし、明治維新による武家政権の崩壊で能楽は極端に衰微する。そののち紆余曲折を経て、今日では毎日どこかで能楽の公演が催されていると言っても過言ではない活況を呈している。

明治維新という動乱期を乗り越えて能楽が現代まで長らえる生命を獲得した背景には、初代梅若実（1828〈文政11〉～1909〈明治42〉。以下、初代実とする）という能役者の存在を無視することはできない。能楽を存続せしめた初代実の戦略のひとつに「越境」がある。何をどのように越境したのか——。答えは「ありとあらゆるもの」と言える。

本論考は、幕末から近代において初代実が能楽とどう向き合ってきたのか、明治維新を乗り越えた能役者の足跡の一部をたどるものである。

I 『梅若実日記』 他の自筆資料

初代梅若実にとって、数え年11歳¹の1838（天保9）年に演じた「雲雀山」子方がおそらく初舞台であり、79歳の1906年7月に演じた「唐船」が最後のシテと思われる。すなわち、初代実は生涯にわたって能を演じ続けた能役者であり、これが彼の輝かしい実績と言える。しかし、没後約100年が経過した現代における初代実のもうひとつの業績は、非常にたくさんの記録を書き残した点にある。

初代実の手になる最大の記録は1849（嘉永2）年閏5月から1808年末日まで、つまり21歳から亡くなる20日前までの60年間、ほぼ毎日綴った日記で、49冊を数える。これを『梅若実日記』（以下、『日記』とする）という。『日記』は長く門外不出の扱いであったが、梅若家先代当主である55代梅若六郎の時代、古川久が『日記』その他の資料を用い1968年から1973年にわたって「初代梅若実年譜稿」全30回を雑誌『梅若』に連載し、能楽界に周知されるようになった。また、1979年に武蔵野女子大学（現、武蔵野大学）能楽資料センターによる『日記』の複写が許され、その閲覧が一般にも可能となった²。

さらに、梅若家現当主の56代梅若六郎と鳥越文蔵の監修のもと、1991年から翻刻作業が進められた。10余名からなる編集委員会が立ち上がり、小林責は編集責任者として、筆者も編集委員として作業に携わり、翻刻本の『日記』が2002年から2003年にかけて出版された³。これにより、さらに広く『日記』が利用されることとなった。

『日記』の価値は、個人的な興味からだけではなく梅若家および能楽を軸とする公的な記録の意識をもって書かれているところにある。こ

1 以下、年齢に関して本論考では数え年を原則とする。

2 小林責「あとがき」（56代梅若六郎・鳥越文蔵監修『梅若実日記』第7巻、八木書店、2003年）による。

3 八木書店刊。全7巻、総ページ数3218ページ。

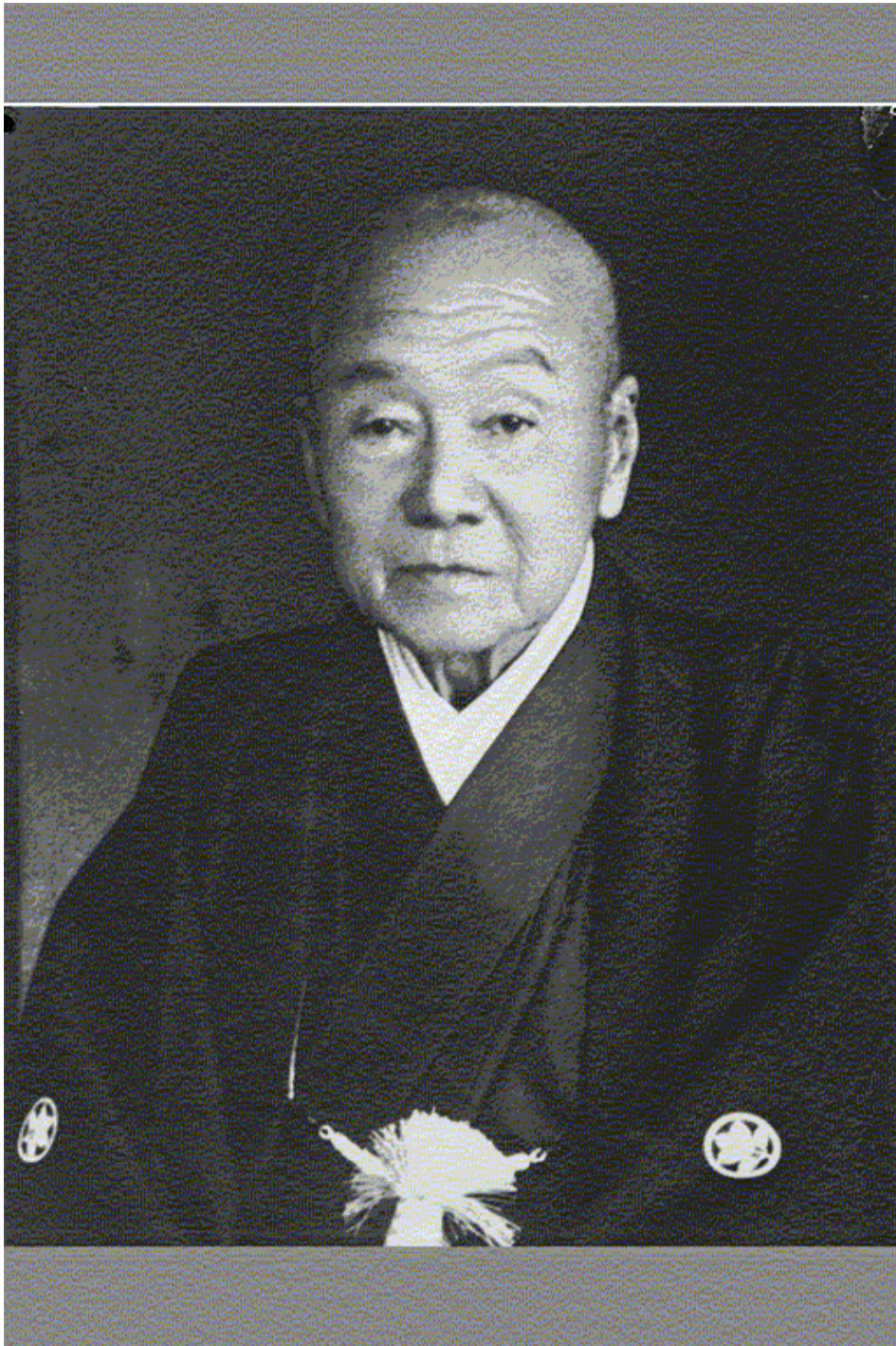


Abb. 1: 初代梅若実（1829〈文政11〉～1909〈明治42〉）
Umewaka Minoru I (1829–1909)

かけての能楽の演能記録・慣習・事件などの解明が進み、従来の近代能楽史が次々と塗り替えられていくことは必至である。

その他、初代実は『芸事上数々其他秘事当座扣并ニ略見出シノ事』⁴（以下、『当座扣』とする）という、1865（慶応元）年から1907年までの能楽に関する秘事・心覚などの雑記、『履歴略書』⁵という自身の履歴などを書き残しており、これらの資料は前掲の古川久「初代梅若実年譜稿」でも紹介され活用されている。また、『装束類買入帳』⁶（以下、『買入帳』とする）という1870年から1897年までの能装束などの購入記録、『門入性名年月扣』⁷（以下、『門入扣』とする）という素人弟子の1848年からの入門記録など、初代実の自筆資料の内容は多岐にわたり、いずれもが当時を知る第一級の史料と言えるのである。

II 梅若家の拡大

梅若家は丹波猿楽出身の家柄で、1416（応永23）年に仙洞御所に出勤した記録が伝わる旧家である。江戸時代に観世座に組み込まれ、ツレ家という地位を与えられた。初代実はその梅若家第52代当主である。

初代実はもともと鯨井家という金融業を営む家柄の出身であったが、51代梅若六郎の後継ぎに望まれて持参金500両で梅若家に養子に入り、商人から武士に転じた。家督相続した1839年は12歳、本人の自覚のないままに身分の越境をなし遂げたと言えよう。以後、能に精進するかたわら、放蕩の限りを尽くす養父六郎の世話をし、異母兄の実家乗っ取りに立ち向かい、知行所のトラブルを処理するなど、さまざまな困難を克服する。明治維新以降、初代実は抜群の政治力と金銭感覚とを発揮して梅若家を繁栄に導くが、それには出自の家業が大きく関与したのではないかとされている。

前述したように梅若家は古い由緒を持つ名門だが、観世座には観世大夫家、およびその分家の観世鍊之丞家という名家がある。初代実は1865年8月、5代観世鍊之丞の弟清之（当時、源次郎）を養子に迎え、実の長女つるとの婚約を実現させる。この時点で男子の授からなかった初代実は不運であったが、鍊之丞家との縁組によって、梅若家にはどのような利益がもたらされたのだろうか。

もちろん、観世座における有利な立場を確保する意図が初代実にはあったに違いない。しかし、それだけではない効果が養子縁組3年後から明らかになる。1868年8月、江戸幕府が崩壊し新たに樹立した明治政

4 梅若家所蔵。複写を武蔵野大学能楽資料センターが所蔵する。

5 梅若家所蔵。『武蔵野大学能楽資料センター紀要』第13号（2002年）に翻刻を掲載する。

6 梅若家所蔵。古川久が『能楽研究』第2号（法政大学能楽研究所、1976年）に資料紹介として翻刻と解説を行っている。

7 梅若家所蔵。複写を武蔵野大学能楽資料センターが所蔵する。また、初代梅若実資料研究会が『武蔵野大学能楽資料センター紀要』第15号（2004年）より、翻刻・解説を連載中である。

府の機構が整えられるなか、武士たちは、朝臣として新政府に出仕するか、今までどおり徳川家に従うか、あるいは農工商の身分になるか、3つの選択を迫られる。初代実は最終的には朝臣を希望するが、『日記』1868年8月9日には以下のような記事が見受けられる（原文を一部書き下し、私に句読点および送り仮名等を付した）。

芸事甚だ未熟には御座候得共、何卒御慈悲を以て是迄之業通りに而相応之御奉公仰付下し置かれ候よう偏に願上奉候。以上。

文意は、自分の芸事は大変に未熟であるが、慈悲の心をもってこれまでのように能楽に携わる業務を命じくださることを切に願う、というものである。

13日、5代鍔之丞らとともに初代実は朝臣願いを提出する。10月10日に新政府より朝臣の許可が下りた際、「能役者ハ鍔之丞筆頭トシテ順ニ呼出シニ相成」と、5代鍔之丞が能役者の筆頭に位置付けられていた。ただし、新政府が彼らを能役者として採用することはなく、初代実に与えられた仕事は一種の警備役であった。ところで、初代実の師匠であった観世大夫清孝は朝臣を願わず農業に従事し、1869年に徳川家を追って静岡に下る。一見、鍔之丞家との縁談の背景には観世宗家から鍔之丞家に鞍替えするための目論見が働いたようにも見える。たしかに、1864年12月に梅若家と鍔之丞家との縁組に関して観世清孝は承諾したものの、仲人の梅若近右衛門が示した難色に追従する態度を示している。予定されていた結納は延期され、翌1865年6月に仲人を大倉六蔵に替えたのち、8月に結納が執り行われる。このように鍔之丞家との縁組はすんなりとなることが運んだわけではなかった。これに辛抱強く取り組んだ初代実からは、鍔之丞家との提携を望む強い意志が感じられる。だが、彼も明治維新の到来という時代の流れを予見することはなく、新政府につくか旧幕府に忠誠を尽くすかの判断を尋ねられたときには、直前まで迷って占師に頼る言動も見せている。

初代実は、維新後にも鍔之丞家との縁組を進める。1875年、5代鍔之丞と初代実の姪ゆき、1902年には5代鍔之丞の長男である6代鍔之丞（当時、織雄）と初代実の次女はなとを結婚させ、大閨閥を形成していく。それは、梅若家の勢力を拡大するという政治的目的のほかに、地謡および後見を梅若家だけで揃えたいという芸術上の欲求に基づいたものと思われる。⁸

皮肉なことに、清之を養子に迎えたのちに初代実は実子の男子に恵まれる。

1868年に誕生した長男の万三郎と、1878年に誕生した次男の六郎（54代。幼名、竹世。以下、六郎とする）である。

初代実没後の1921（大正10）年に実子の万三郎と六郎、そして娘婿の6代鍔之丞の3人は観世流から独立して梅若流を樹立する。彼らは「万・六・鍔」と称され能楽界の3名人として華々しい活躍を遂げた。これ

8 初代実の家長としての活動は、三浦裕子・氣多恵子「『梅若実日記』に見る家長としての初代梅若実—平野家とのかかわりを中心に—」（『楽劇学』第11号、2004年）を参照されたい。

は初代実の後継者育成が成功した証しと言えよう。しかし、初代実は梅若流樹立を、遠い将来の希望としていたのだろうか。明治初年にはやくも梅若流樹立が囁かれたようだが、初代実は『日記』1901年7月9日に「一度先祖観世流へ隨身致シタル事故（略）観世流と違フナゾ心外ノ至リト云事」とある。文意は、一度先祖が観世流に従ったのであるから観世流を離れるなど心外であるということで、観世流からの独立を否定している。鍊之丞家との提携は初代実が梅若家のために打った布石であったのに、息子たちは初代実の意図とは別の方向に走ってしまったと考えることもできよう。1954年、梅若流は観世流に復帰する。

残念ながら清之とつるとの結婚は1895年12月に破局を迎える。初代実が2人の子に恵まれたための悲劇と思われる。観世家に復帰した清之は改めて一家を建てたが、これがのちの観世喜之家で、現在で4代を数える。清之と梅若家およびつるとして離縁は不幸な出来事であっただろうが、これが端緒となって観世喜之家という演能団体が確立されたことは、能楽界にとって新たな財産を獲得したことでもあった。

III 能舞台の建設

1865年4月、清之を養子に迎える直前に初代実は自宅に稽古用舞台である敷舞台を建てている。この敷舞台のうち本舞台の部分は2間四方⁹と定寸の3間よりかなり狭いものであった。正式の能楽を上演することは難しく、初代実はのちに「村芝居にも劣るような始末」¹⁰と安普請を振り返っている。梅若家の舞台は1871年に篠山藩旧藩主の青山家の能舞台の譲渡を受け、この敷舞台に取って替わる。

敷舞台設営は、初代実自身が稽古場を確保するために行ったものであったが、はからずも維新後の拠点の準備ともなっていた。能舞台を確保した初代実はどのような活動を展開していくのであろうか。

敷舞台設営以前から初代実は自宅で稽古能などを遂行していた。明治維新の動乱で一時中断するものの、1868年11月に、早くもアシライ袴能という略式の能の上演を再開している。また1885年に始まる一六の稽古会¹¹は、梅若家一族および玄人弟子養成の場となり、1908年末までに759回を数え201番の能を繰り返し繰り返し稽古している。

ところで、江戸時代、各宗家は自宅にしつらえた能舞台で稽古能という建前のもと能楽を演じていた。しかしシテ方5流のうち金剛流を除けば、明治維新直後に、各宗家は自宅における活動を休止している。たとえば、観世清孝は前述したように1869年に静岡へ下り、1875年に東京

9 幅2間、奥行きは後座をあわせて2間半、面積は10畳、それに1間半の橋掛りがついた敷舞台であった。

10 「初代梅若実聞き書き—その4—」（『梅若』1973年3月号）。

11 1と6の付く日に催していた稽古会のこと。これに関しては拙稿「初代梅若実と一六の稽古」（『能と狂言』第3号、能楽学会、2005年）を参照されたい。

に戻る。そして、1876年末から断続的に自宅で月並能を催すようになる。宝生が一応の能舞台を確保するのが1885年、喜多が1893年である。¹²

初代実は敷舞台時代の1870年1月から能楽公演を意図的に公開するようになる。つまり、自宅の催しに公的な性格を持たせたのである。そのうえ青山家の能舞台を譲り受けたのちは、本格的な能楽公演を催すことが可能となり、外国の賓客を自宅に招くこともあった。¹³ 明治初年にシテ方5流の宗家ではない梅若家が最もはやく、そして最も活発に、自宅で能楽公演を催していたのである。

また、1881年に能楽社という組織が芝能楽堂を建設する。これ以前の梅若家の能舞台は、梅若家が利用するだけでなく、能楽そのものの拠点であり、能楽史において重要な意味を持っていたと言える。

IV レパートリーの拡大

式楽としてではなく娯楽として新しい観客層に向けて積極的に能楽を提供していった初代実は、これに付随するようふたつの事象に対して意欲を見せる。ひとつは、江戸時代には固定化されていた上演演目を増加させることであった。

初代実が開拓した演目には別能といわれる作品群がある。1840（天保11）年に6冊の謡本が山本長兵衛より出版されるが、これに収められた28番のことをのちに別能と称するようになる。別能は江戸時代を通じて観世座の正式なレパートリーに入ることはなかったが、このように謡本が整備されており、しかも部分奏演が伝わっている演目もあったので、能のレパートリーを拡大する際に格好の対象となったわけである。初代実が別能を初演する場合、『日記』に「再興」と書かれることがほとんどで、上演されなくなった演目を復活させたという気持ちが表れたものである。

初代実がシテを初演した別能に、1874年の「鳥追舟」、1876年の「雨月」、1886年の「室君」がある。シテを演じたのではないが梅若家で上演したことから初代実が何らかの関与をしたと思われる別能として、1874年の「水無月祓」、1875年の「枕慈童」「歌占」、1886年の「胡蝶」、1890年の「現在七面」「三笑」がある。なお「碓潜」は1899年11月および1907年11月、1908年11月の一六の稽古会で上演されているが、特に「再興」とは記されていない。そして、1908年11月15日の月並能で「再発碓潜」となっている。この記述の意味はよくわからないが、初代実は一六の稽古会で練り上げた演目を月並能で初めて公開したと意識していたのではないだろうか。この月並能から2ヶ月後に初代実は病死するので、最晩年までレパートリーの拡充に努めていたことがわかる。

12 詳しくは本誌にある小林責「明治能楽小史一主として東京の役者および能楽社の流れについて」を参照されたい。

13 詳しくは本誌にあるShinko Kagaya “The First Umewaka Minoru and Performances for Guests from Overseas” を参照されたい。

別能以外にも初代実は1872年に「仲光」を初演し、1891年に「菊慈童」を六郎に初演させている¹⁴。

V 能面・能装束の収集

初代実が見せたもうひとつの意欲は能面・能装束の収集であった。これらは能を演ずるための道具であるが、それ以上の意味を持つものである。

ところで、現在の梅若家当主56代梅若六郎は華麗な芸風で高い人気を誇る。優れた解釈で古典の能を演じるだけでなく、新作能や古い台本を復活することにも挑戦し続けている、最も多忙な能役者の1人である。56代六郎の幅広い活躍は、曾祖父の初代実が築き上げた有形無形の財産に負うところが大きい。無形の財産とは、梅若家の権威である。有形の財産のひとつには、実が収集した能面と能装束があげられるのである。養父の51代六郎は大変な浪費家で、初代実が譲り受けるものはなかったと『履歴略書』に記されている。『買入帳』によると初代実は1870年から1897年にかけて数多くの能装束を購入しており、『履歴略書』には「面・装束・小道具、悉皆調。明治廿年迄ニ。○当時、宅計リ也」と、1887年までに面・装束・小道具をすべて調べたのは梅若家だけであったと、初代実の自負が書かれている。能はコスチューム・プレイではないが、能面・能装束の選択によって1曲の成否が決まる場合がある。特に能面は演出家にも似た絶対的な存在である。優れた能面・能装束は所蔵する家の権威を高めることにもなるのである。

梅若家は1945（昭和20）年の東京大空襲で能面約150面、装束500領以上を焼失してしまったという¹⁵。しかし今日でも素晴らしい能面・能装束をたくさん所有している。初代実没後に入手したものもあるだろうが、名品の多くが初代実による収集と考えられる。また、梅若家のコレクションは大変にバラエティーに富んでいる。これは初代実が能楽の名家および大名家・商人・装束屋など各方面から輩出された逸品を精力的に集めた結果と思われる。

たとえば『買入帳』および現在の名称¹⁶でもある「赤地火焰太鼓金霞唐織」は大給藩旧藩主の松平家から1878年に購入している（価格は不明）。現在、「紺地段入子菱雪持笹厚板」と称されているものは、『買入帳』に「花色紅茶段雪笹厚板」とあるものであろう。これは1879年に日本橋佐内丁の森田喜兵衛という、おそらく商人から金24円で購入している。また、現在「赤地花鳥長絹」といわれるものは、『買入帳』に「赤地金花鳥長絹」とあるもので、1884年に装束屋の関岡長右衛門から金20円で購入したものであろう。

14 『日記』1891年10月4日に、六郎（当時、竹世）の順養子願濟祝能における「菊慈童」について「本日再興初テ勤ル」とあるが、『日記』1886年12月12日に観世清孝が「菊慈童」を演じた記録があるので、「再興」の意味を検討する必要がある。

15 『華の能 梅若500年』（講談社、1981年）による。

16 現在の名称はすべて展覧会図録『能の華』（朝日新聞社、1988年）によった。

能面の方に目を転じてみよう。「黒式尉」は狂言方が用いる面だが、現在、梅若家所蔵のものは重要文化財に指定されている。明治維新前後の喜多流宗家13代勝吉は伝来の面の多くを手放してしまったことがいわれており、この面は12代宗家能静の手許にあったことが確実で、勝吉時代のころに初代実が入手したものと推定できる。能面「老女小町」も能静の手許にあったことが確実な面で、やはり勝吉時代あたりに初代実が入手したのであろう。この「老女小町」は2002（平成14）年に横浜能楽堂で催された「秀吉が見た『卒都婆小町』」という、16世紀末の能楽の実態を探る公演で、シテを演じた山本順之が用いた。山本は観世流の鉄仙会に所属しており、梅若家の役者ではない。この能面を使用することで、実験的な試みに芸術的な奥行きが広がったと思われる。珍しいところでは落語家の三遊亭円朝が初代実に贈った「喝食」も高い評価を得ている能面である。

このように、梅若実の収集した能面・能装束は現代の能楽界に多大な貢献をしている。本来は梅若家のためのコレクションが、時を越え、家を越えて活用されているわけである。しかし、残念ながら、彼がこれらの能面・能装束を用いてどのような能を舞っていたのか、現在ではそれを知る手掛かりは残されていない。

まとめ

初代実は明治元年に41歳であり、82歳で亡くなるちょうど折り返し地点に立ったときに明治維新を迎えた。以後、初代実は能楽の新たな秩序を模索し確立しながら、能楽界の中心人物となっていく。それは、これ以前の41年間、近代という新たな時代の到来を全く予想しないところで、後半生の活躍のための長い準備期間を生きてきたからこそ可能になったことである。

限られた誌面で初代実の波乱に満ちた生涯を言い尽くすことは無理であるが、今述べた点は強調してもしすぎることはないと思われる。今後はさらに時間をかけて『日記』を熟読し、初代実の真の姿を明らかにしたいと思っている。

本稿は2005年8月31日から9月2日までウィーンで開催されたEAJSにおける5名のパネル「Exploring, Expanding, and Crossing Borders Into and Through the Meiji Period: Noh Performer, the First Umewaka Minoru (1828–1909)」の冒頭に行った筆者の発表「初代梅若実という能役者—『梅若実日記』をめぐって」"The First Umewaka Minoru; Approaching a Noh Performer Through His Diary" をもとにしたものである。加筆訂正に当たって、さまざまなご教示をくださった小林責、スタンカ・ショルツ両氏に深く感謝する。なお、文中は敬称略とした。